

京大戦 部便り

目次

1. 京大戦 講評

- 1.1 監督より
- 1.2 主将・女子主将より
- 1.3 次期主将・女子主将より

2. 京大戦 試合経過

3. 選手の言葉

4. チーフの言葉

5. 試合結果

6. 自己記録更新者一覧

7. 2016 年度部内五傑

8. 主務より

1. 京大戦 講評

1.1 監督より

監督・藤田靖浩

今年度の京大戦は 残念ながら四連覇を目指した男子は 83 点差と大差の惨敗、女子は直前の走幅跳の内山の怪我が響き連覇を逃しました。

男子三段跳で 3 年木下が 15m24 の 40 年ぶりの大会新で優勝、4 年兄井がヘルニア手術後で最後の対校戦だけはなんとか出たいということで無理をおして出場した 400mH の優勝以外は全て期待以下の結果となりました(男子棒高跳で三宅、女子 400m で坪浦、800m で高石は大会新ながら PB は出ず)。

相手の記録もあまり良くはありませんでしたので、ただただ練習への取り組み姿勢、試合への意気込みが足りていなかったという結果です。

私自信も含め大いに反省するところでもありますので、この悔しさをバネに来年は必ず勝利すべく、集中して練習に励んで参りたいと思います。

1.2 主将・女子主将より

主将・實田雅治

トラック最後の対校戦である京大戦が駒場グラウンドで行われました。結果は今の 4 年生が入学してから続いていた 3 連覇を途絶えさせてしまうばかりか、京大に史上最高得点をとられてしまうという屈辱的なものになってしまいました。

対校戦全体の具体的な敗因は対校選手の 2,3 番手の選手の力の無さです。東大の 1 番手の選手の結果だけ見れば優勝している種目も多いですし、大会記録の更新も多く見られました。特に長い怪我から復帰し 400mH で優勝した 4 年生の兄井や大会記録を更新した二年生の三宅は安定した活躍を見せてくれました。その一方で、2,3 番手で 5 位や 6 位をとってしまい、その種目で結果的に負け越してしまうという展開がかなり多いという印象でした。本来、部員数の多い東大陸上部が層の厚さがポイントになる 2,3 番手の争いで後塵を拝するというのはあってはならないことですし、強い選手が入ってその選手だけが活躍して得点を取ってくるという今の東大を象徴しているかのような試合内容でした。今までの対校戦の結

果を受けて、僕が主将として中心となり1年間作り上げてきた部ですが、陸上に取り組む姿勢として今まで正しいと思っていたことはこの冬に全て考え直さないといけません。今年最後の対校戦として箱根予選会があり、4年生はそこで引退となります。今年的一年なぜ成功しなかったのかをしっかりと考え直し、来年は後輩が同じ思いをしないように、伝えなければいけないことを伝えていければと思います。

最後に、今シーズン残りの対校戦として箱根予選会を控えていて、長距離パートはこの予選会に向けて全力で準備してきた部員が多くいます。OB・OGの皆様には今後とも変わらぬ応援と、ご指導、ご鞭撻のほどをよろしくお願いいたします。

女子主将・坪浦諒子

京都大学に4点及ばず、目標であった連覇を達成することは出来ませんでした。それぞれの競技レベルの高さから優勝は十分に見込めておりましたが、試合直前に跳躍2年内山の故障が発覚し劣勢を予想せざるを得ない状況となっていました。その状況でも、何としても勝とう、自分の役目を果たそう、というチームを思い諦めずに必死になる姿勢が女子パート全体にあり、女子パートのチームとしての成長を感じました。結果として負けてしまい悔しさは残りますが、この京大戦では女子選手一人一人が主役でありましたし、私たちに今できる最大限のことをしたと思っております。

この度の経験を通して、自分がチームに貢献できる喜びと出来ない悔しさを一人一人が強く感じていると思います。その思いを胸に、個人としてもチームとしても必ずや更に強くなると確信しております。来シーズンは中距離3年の高石が女子主将を務めますが、彼女を中心にお互いを高め合いながら切磋琢磨して、更なる成長をしていくことを期待しております。

最後になりますが、応援に駆けつけて下さったOB・OGの皆様をはじめ、日頃から温かくご支援して下さる皆様に心より感謝申し上げます。今後とも頑張っ

1.3 次期主将・女子主将より

次期主将・近藤秀一

今回の京大戦は男子4連覇をかけて臨みました。しかし、結果は京都大学に史上最高得点を更新されての大敗に終わりました。コンディション不良や怪我をしている選手が多く、満足なパフォーマンスができなかったり多くの補欠選手を起用せざるを得なかったりしたことが1番の原因と考えています。また、地力、大会にかける思い、陸上競技に対するエネルギー、全てにおいて京都大学に力及ばなかったことを痛感しました。

今シーズンの結果が物語るように、この部は非常に厳しい状況に立たされています。しかし今回の大敗を機に、部員1人ひとりが本気で変わろうとしているのを感じます。今までは他人事でやり過ぎしていたことも、チームとして何かできなかつたろうかという問題共有の意識も生まれています。現実をしっかりと受け止めて、そこから何が生み出せるかをチーム一丸となって考え抜き、愚直に行動して参ります。必ずや、来シーズンは見違えるほど強くなったチームをお見せします。これからも応援よろしくお願い致します

次期女子主将・高石涼香

OB、OGの皆様にはいつも温かいご声援のほど、感謝しております。新女子主将の高石です。京大戦の総括の言葉をこの場をお借りして申し上げます。

エントリーの時点で東大の女子パートで試合に出場が現実的なのは6人であり、京大に比べて人数そして選手層ともに劣る状況ではありました。しかし、100mと走幅跳で内山(2)、400mで坪浦(4)、800mと3000mで高石(3)が優勝できる見込みが強く、各種目に穴を空けないように多種目出場や専門種目外の種目に出場すれば東大の二連覇は得点計算上できるという想定でした。

しかし、一週間前の関東大学女子駅伝の前から足の甲に痛みを訴えていた内山が、駅伝後により症状を悪化させてしまいました。内山が100mか4*100mRのどちらかだけでも出場して点数をとることもパートの内でした話し合われましたが、痛みの程度や今後のシーズンのことを考え、影響の少ない砲丸のみに出場してもらうこととなりました。

内山のマルチな能力にパートの得点が依存していたこ

ともあり、当日は補欠に登録していた100mに高石が、走幅跳に藤原が出場することになりました。

こうした出場の仕方にはもちろん怪我や、専門種目のパフォーマンスを落とすというリスクも伴いますが、チームで穴を埋めさえすれば優勝が可能だという見込みがあったからこそ、このような手段をとりました。個人が専門種目で結果を残すにとどまらず、チームとして対校戦に臨むということを可能にしたのは、他でもなく去年の京大戦優勝を導いた白形先輩、そして今年一年パート全体を京大戦に向けて鼓舞してくださった坪浦さんの力だったと思います。

結果は京大の層の厚さを前に力負けでした。スコンクや勝ち越しが期待されていた種目で取るべき得点を取れなかったこと、そしてその他の種目でそれをカバーできなかったことにより、4*100mRの前の時点でほぼ勝敗は決まってしまうしていました。しかし、作戦通りスパートを早くからかけて集団から抜け出す力走をみせた藤原(3)や坪浦の100m、400mでの大学ベストなど、良いパフォーマンスも見られたことは確かです。

来年は短距離、跳躍選手の入部がこのままないようですと、かなり厳しい戦いとなってしまいます。少なくとも100m、400m、走幅跳で専門の選手を出せるようなチームとしていくために、高校生勧誘や秋からの新歓を見直していく所存です。また、関東大学女子駅伝との兼ね合いの問題も浮き彫りになりました。この駅伝を通して専門外の選手にも出走をお願いしましたが、それが今回の京大戦に悪影響を及ぼしてしまったことは否めません。

こうしたリスクは十分に話し合った上での出場でしたが、もし今後出場を検討するのであれば、考えなければならぬ要素だと再実感しました。

今回で明らかになった課題点を正し、来年に向けてより一層精進してまいります。よろしく願いいたします。

2. 京大戦 試合経過

◎トラック種目

10:00 男子 400mH 決勝

1レーンに本田(1年)、3レーンに兄井(4年)、5レーンに松田(2年)の出場。最初の種目であり、ここで京大に勝ち越して、チームに勢いをつけられるかどうか注目

された。

序盤は、兄井と一人の京大の選手が張り合い、その次を残りの4人が争う展開となった。兄井は徐々にリズムに乗り、軽快にハードルを越えていく。しかし、京大の選手も勢いに乗ってくる。3位争いに食い込みたい松田は前半から積極的なレースを見せ、良い位置につける。大学では400mH初出場の本田は、1年生ながら必死に他の選手を追いかける。200m地点を過ぎると、各選手の差が広がっていく。良いリズムで第3曲走路に入った兄井が一步リードし、先頭を走る。松田は京大の選手と3位を争うが、京大の選手が追い上げてくる。本田は後半への切り替えがうまくできず、苦しい展開となる。そして、後半も勢いを保った兄井が54"29で1位、松田がUBの56"53で5位、本田が59"76の6位でフィニッシュ。東大は9点を獲得したが、京大に負け越してしまった。

京大戦に向け努力を積んできた兄井が有終の美を飾り、後輩2人に範を垂れる形となった。来年度の試合で雪辱を果たすべく、下級生の今後の活躍に期待したい。

10:15 男子 100m 決勝

対校男子100mはトラック二種目めであった。3レーンに井上(1年)、5レーンに聲高(1年)、7レーンに阿久津(2年)の出場。

当日のコンディションは気温も高くなく、走りやすいもので記録も期待された。事前から厳しい戦いになることは予想されていた種目であり、資格記録が上の選手に勝てるかどうかは鍵であった。

スタートから京大の2選手に先行され、70m付近までは井上、阿久津が4、5着を争う展開。しかし、80m付近で京大の選手に先行を許し、そのままゴール。結果は井上が11"03で4位(着差あり)、阿久津が11"07で5位、聲高が11"11で6位だった。このとき風は、±0.0mだった。3人ともベストは10秒台ながら、力を出しきれなかったことが敗因であるだろう。ただ、京大は四年生が2人、一年生が1人というオーダーに対し、東大の方は2年生が1人、1年生が2人というオーダーで、今後のことを考えると悲観的になる必要はないと言える。この冬の練習で力をつけ、来年以降圧倒的な差をつけることを期待したい。

10:20 女子 100m 決勝

3レーンに高石(3年)、5レーンに坪浦(4年)の出場。2人共専門種目ではないが、女子トラック最初の種目であるため、ここでしっかりと得点して東大の勝利に繋げてほしいところであった。

スタートは2人もまずまずであったが、高石が二次加速できず序盤から遅れてしまう。中盤伸びてきた坪浦と2レーンの選手との一騎打ちとなるが、ラストで坪浦が競り勝って13"07で1位、高石は13"99で4位、この時の風は±0.0mであった。内山不在の中ではあったが、上級生の意地を見せ同点に持ち込んだ形となった。

10:35 男子 1500m 決勝

妹背(4年)、近藤(3年)、長谷川(3年)の出場。やや肌寒い天候となった。

近藤がスタートから飛び出し、他の選手は一つの集団となった。近藤は後続に大きな差をつけ400mを62"5で通過。後続の5人の集団は妹背が3番目、長谷川が最後尾につけ400mを65"2で通過した。800m付近で妹背が集団の前を窺うも、京大の選手にブロックされる。またこの辺りから長谷川が集団から遅れ始める。800mまでの1周は近藤が64"6、妹背と長谷川が68"7だった。妹背はその後何度も前を狙うがそのたびにブロックされてしまう。1200mまでの1周は近藤が65"5、妹背が65"4、長谷川が67"2。近藤はそのまま独走してゴールした。妹背は必至のスパートをしても、京大の3選手に敗れ5着だった。結果は近藤が4'01"33の1位、妹背が4'06"28の5位、長谷川が4'14"76の6位となり、9点獲得で3点の負け越しとなった。

来年度の対校戦での勝利のためには、この敗北を忘れず冬季の鍛錬を怠らないようにしなければならない。

11:50 男子 400m 決勝

2レーンに長久(4年)、4レーンに河野(4年)、6レーンに小嶋(3年)の出場。曇っていてやや涼しいものの、比較的走りやすいコンディションであった。自己ベストでは京大が1~3位を占めており厳しい戦いが予想された。

レースは序盤、今季好調の一番外側のレーンを走る小嶋が積極的に飛ばした。河野もいつも通り伸びやかな走りを見せる。一方、長久は序盤の時点でかなり遅れをと

ってしまう。バックストレートに入ると、3レーンの京大の選手が徐々に前の河野、小嶋との距離を詰め、180m地点で河野を、300m地点で小嶋をかかわす。河野、小嶋も粘りを見せるが、ホームストレートで他の二人の京大の選手にも抜かれる。長久も前との差を縮めたように見えたが抜くには至らず。小嶋が50"20の4位、河野が50"56の5位、長久が50"98の6位でゴール。

結果的には下馬評通り、1~3位を京大が占めて東大の完敗であった。河野、小嶋は今季49秒台を出しており、長久も比較的好調であったが、各人の実力通り、もしくはそれ以上の走りをするのが求められた京大戦でこの結果は調整不足、練習不足と言わざるを得ない。強い4年生が引退する短長パートの奮起に期待したい。

12:00 女子 800m 決勝

2レーンに荒木(3年)、4レーンに高石(3年)の出場。高石が確実に1位を取り、荒木が京大の選手にどこまで食らいつけるかがカギとなる。天候は曇りで少々肌寒さを感じた。

スタートで高石が勢いよく飛び出し、コーナーで早くも外側の選手を抜く。集団は一気に縦長になり、バックストレートでは高石が先頭、京大の2人が2位集団、そして荒木が4番手という形になった。高石は快調に飛ばし、400mを64"3で通過。一方、荒木は京大2人との差を維持したまま72"6で400mを通過した。高石はそのまま独走を続け、2'16"42の1位でゴールした。この記録は大会新記録であった。荒木は500m過ぎから前との差を詰め、600mあたりでほぼ追いついたが、そこからスパートで再び差をつけられてしまい、2'32"63の4位でゴールした。東大としては5点を獲得し勝ち越しとはならなかった。

来年に雪辱を果たすべく、この冬に練習を積んでいきたいところである。

12:15 男子 4×100mR 決勝

5レーンに村井(2年)-阿久津(2年)-井上(1年)-聲高(1年)の走順で出場。今期ベストで上をいく京大に対しアンダーハンドパスを取り入れ、さらに走順を大幅に入れ替えて勝負に挑む。

1走の村井は鋭い飛び出しを見せるとそのままスピードに乗って京大と五角のレースを展開する。後半少し差を詰められるがスムーズに2走の阿久津にバトンパス。阿久津はバトンを受け取ると格上の京大を相手に粘りを見せる。後半こそ追いつかれてしまったが3走の井上へのバトンパスはスムーズに行われた。井上は京大の3走にしっかりと食らいついていき、差を少し広げられたものの僅差で4走聲高にバトンパス。聲高は不調の中で粘りを見せるが100mで優勝した京大の選手に追い上げることは叶わず、42'00の2位でゴール。

今回のレースではバトンパスが上手くいっているにも関わらず大差での敗北となってしまった。これはリレーメンバー全員の走力を大幅に上げることが必要であることを示している。今季の対校戦は全て終わったので冬季練習をしっかり積んで来春からの活躍することが期待される。

12:30 男子 5000mW 決勝

棟重(4)、堀江(3)、千菊(1)が出場。京都大は全カレ出場選手を2名擁し、苦しい戦いになることが予想された。

スタート直後から京都大の選手2名が飛び出す。千菊、堀江の2人は第2集団に付き、抜け出す機会をうかがう一方棟重は序盤から遅れをとる展開に。千菊、堀江は1000mを4'20前後で通過、棟重は4'43で通過した。そのまま膠着状態は続き、千菊、堀江が2000mを4'27、3000mを4'28のラップで通過した。棟重はペースを落とし2000mを5'24のラップで通過した後、3000m手前で失格となった。3000m通過直後、京都大学の選手が仕掛け第二集団がばらけ始める。千菊は全体4番手、堀江は5番手と京都大の選手に遅れをとる。3400m通過時点で堀江が千菊を捉え、4番手に上がる。千菊の歩きは苦しく、前の堀江との差がじわじわと開き始める。4000mのラップは堀江が4'42、千菊が4'51。そのまま京都大学の選手との差は広がり続けるも、2名とも最後まで懸命に前を追った。結果、堀江が22'49"30で4位、千菊が23'09"26の5位でフィニッシュ。

今回は選手の怪我や調整不足などの要因で厳しい結果となってしまった。しかし堀江、千菊はまだ来年もチャンスがある。今後の対校戦での勝ち越しを期待したい。

13:10 女子 400m 決勝

3レーンに坪浦(4年)、5レーンに高石(3年)が出場。資格記録では坪浦が1位、高石が2位でありスコンク勝ちが期待された。

前半から坪浦はスピードを出し、かなりいいペースで飛ばしていく。内側のレーンながらも200mの地点で見かけでも1位に。高石はその時点では3位だった。期待に応え坪浦は他を引き離し58"11の1着でゴール。見事な大会新記録だった。ただ高石はすでに多くのトラック種目に出場していたためか伸び悩み、1'01"69で4位に終わった。

期待通りまではいかなかったが、両校5点ずつ獲得という五角の戦いを見せてくれた。

13:20 男子 800m 決勝

早川(4年)、坂口(3年)、小野(2年)の出場。天候は晴れ。資格記録では小野、坂口、早川の順に3,4,6番目であり、厳しい戦いが予想された。

前半から実力のある京大の2選手が先行し、それに東大の3選手が続くかたちとなった。400mの通過は、早川が57"4、小野が57"5、坂口が57"8。2周目のバックストレートあたりから小野、早川が上位を伺うが、実力で上回る京大の選手の走りには敵わなかった。小野は最後まで粘るも、1'56"68の3位。早川はラストで失速し、1'57"86の6位。坂口は1'57"40の5位であった。

小野はラストの粘りなど、実力を発揮できなかったわけではないが、京大選手の力には及ばなかった。早川はもともと前半型であるが、ラストの失速がもったいなかった。坂口は、今大会は動きが悪く、実力を発揮できなかった。総評として、実力が足りなかった。現在対校選手として活躍している選手のさらなる実力アップや、まだ対校選手になっていない、ポテンシャルのある選手の成長によって、来年のリベンジを果たしたい。

14:00 男子 200m 決勝

2レーンに後藤(4年)、4レーンに聲高(1年)、6レーンに河野(4年)の出場。午前中の短距離種目では100m、400m共に完敗を喫しており、絶対に負けの許されないレースであった。

しかしその思いとは裏腹に、レース序盤から応援席に

衝撃が走る。2時間前に行われた400mの疲れからか、短距離チーフであるエース河野はスタートから全く力が入らず、他の選手との差がどんどん広がっていく。そのままスピードを上げることができず、25"41の6着でゴール。一方今シーズン着実にタイムを伸ばしていた後藤は、好調なスタートを切り両隣の選手に食らいついていたが、カーブの終盤あたりから徐々に離されてゆき、力及ばず23"00の5着でゴール。下馬評を覆すことは叶わなかった。1年にしてエースである聲高は、無難なスタートを切り勝利が期待されたが、9月初頭の膝の怪我から始まった不調のためか、持ち味である後半の追い上げができず、22"50の4着でゴール。このとき風は±0.0mであった。

結局100m、200m、400mの全てにおいて京大に1位2位3位を譲ることになり、短距離ブロックは大きな屈辱を味わう試合となってしまった。新しい幹部の下、来シーズンに向けて確実な成長が求められる。

14:40 男子 110mH 決勝

2レーンに中島(4年)、4レーンに村井(2年)、6レーンに松田(2年)の出場。京大の3選手は全員申請タイムが15秒前半であり、一方東大は全員が16秒台であるため、厳しい戦いが予想されていた。気温は20度半ば、日差しもそれほど強くなくグラウンドコンディションは良好であった。

レースは7レーンの京大の選手が先行。その後を、好スタートを切った村井と京大の2選手が追う展開。3台目付近までは村井を含む3選手が横並びの状態。次第に京大の5レーンの選手がリードを広げられたが、3レーンの選手には9台目までわずかにリードしながらレースを進めていた。しかし10台目でリード足がハードルにぶつかり転倒。一方、中島と松田はともに序盤から上位4選手に少しずつ差を広げられていたが、10台目を超えた後に転倒した村井と同じく転倒した3レーンの選手を抜き、松田が16"48の3位、中島が17"01の4位でフィニッシュ。村井は転倒後すぐに立ち上がってフィニッシュするも17"88の5位。この時風は-0.2mだった。

結果として下馬評を覆して9点獲得した。冬季練習でしっかりと練習を積んで、来シーズンはハードル種目で高得点を取れるようにしたい。

14:55 女子 3000m 決勝

高石(3年)、藤原(3年)の出場。高石は実力が抜けており、藤原も好調であって、高得点が期待された。

スタートから1000mは京大の2選手が先行し、それに高石、藤原と続く形となった。1000mの通過は集団で、3'40。集団の中で時々順位を変えながらレースが進み、1600mを過ぎたあたりで藤原が先頭に立ち、残り3周になったところで一気にペースをあげた。高石も藤原に続き、京大選手を振り切った。2000mの通過は藤原が7'17、高石が7'19。ラスト1周に入り、高石がさらにペースを上げ、藤原を追い抜かして1番に。そのまま京大を大きく引き離して高石が10'39"29の1位、藤原が10'48"71の2位でゴール。

高石は本日のトラック競技4種目目であったがその疲労をものともせず実力を見せつけた。藤原も先週の関東大学女子駅伝に続く連戦ながらも、十分に実力を発揮した。3000mは今後の女子の対校戦において得点源になると思われるので、今後も実力の維持、向上に努めたい。

15:15 男子 5000m 決勝

近藤(3)、阿部(2)、栗山(2)の出場。近藤は3連覇がかかる。栗山は1週間前に自己ベストを出すなど好調で、阿部も持ちタイムは14分台であるため、勝ち越しが期待された。

スタート直後に近藤が飛び出しそれに京大の選手が一人つき、後方で阿部、栗山を含む4位集団が形成された。近藤は1000m通過が2'50とハイペース。阿部・栗山は2'58で通過。先頭二人は近藤が終始引っ張る展開で、2000mを2'52、3000mを2'56、4000mを2'57のラップで通過。ラスト250m付近で京大の選手に前に出られるも、近藤がラスト100mで抜き返し、14'23"62で優勝。自身の持つ大会記録に迫る好記録であった。一方、4位集団の阿部、栗山は共に1000mを2'57、2000mを2'59、3000mを3'06のラップで通過。しかし3000m通過後栗山がペースダウンし、4000m付近で阿部も仕掛けた京都大学の選手に後れをとった。4000mのラップは阿部が3'08、栗山が3'25で、その後も順位を覆すことは出来ず、阿部が15'20"27の5位、栗山が15'44"23の6位でフィニッシュ

シュした。

近藤が好走する一方、2年生の二人には厳しいレースとなった。しかし、東大記録更新を目標に掲げる箱根駅伝予選会が目前に控えているため、そこでの今回の経験を生かした奮闘を期待したい。

15:40 女子4×100mR 決勝

5レーンに荒木(3年)-坪浦(4年)-堀越(3年)-高石(3年)の走順で出場。内山の欠場を受けて厳しい戦いとなった今大会女子の最終種目は、良好なグランドコンディションの中でのスタートとなった。

1走の荒木はまずまずのスタートを見せたが、京大の短距離選手のスピードには敵わず間もなく抜かれてしまう。2走の坪浦は安定した走りを見せるが、差は10m以上あり追いつくには至らない。3走の堀越も懸命な走りを見せるが、内側の京大に差を広げられる形となる。3、4走間のバトンパスにやや時間がかかってしまい、4走の高石は約30mの差を追って走るようになった。この差を大きく縮めることはできず、54"84で2位という結果に終わった。

層の厚い京大とは対比的に、特に短距離の層の薄さを露呈するレースとなってしまった。少数で戦い抜いたことは評価されるべきで、専門外種目への取り組みは今後もしっそう求められるが、一方で、来年度の勝利に向けて女子部員の確保が重要課題であることも確認された。

15:50 男子4×400mR 決勝

京都大学には七大戦で大敗しており、苦戦が予想された。今大会の対校400mでも京大にスコルク勝ちされており、相手は調子の良さが伺われる。しかし東大は、最初の種目の400mHで見事優勝した4年兄井をはじめとして4人中3人を4年生占め、上級生の意地を見せたいレースであった。

最終種目ということでチーム全体の声援を受けて2レーンからスタート。小嶋(3年)-兄井(4年)-長久(4年)-河野(4年)の走順である。小嶋は前半から積極的にとぼすものの、相手が一枚上手か。徐々に差をつけられてしまい、そのまま兄井にバトンパス。兄井も前半からとぼし、京

大との差をいくぶんか詰める。しかし、後半京大に走力差を見せられ、やや差を広げられてしまい、3走長久へ。長久も力走するが、前半から徐々に差を広げられてしまう。アンカー河野は何とか前との差を詰めようと必死に食らいつく。しかし、最後まで差は縮まらず、ホームストレートでは逆に差を広げられてしまい、京大に敗北。タイムは3'22"00であった。

結果としては、下馬評通りに力の差を見せつけられての敗北であった。東大の主力は4年生であった一方、京大のメンバーには下級生も多い。来年以降の七大戦及び京大戦を見越しても下級生の大幅なレベルアップが求められる。

◎フィールド種目

10:00 男子走高跳 決勝

木下(3年)、赤塚(2年)、村井(2年)の出演。曇り空であったが、適度に涼しく競技しやすいコンディションであった。六点制であったため、村井も三番手としてエントリーすることとなった。また、赤塚は怪我からの復帰直後の試合となり、不安の多い試合であった。

村井は確実に記録を残すため、1m50から競技を始めた。はさみ跳びではあったが、1本目で確実に成功させた。しかし、村井はもともと4×100mリレーにも出場予定であったため、点数獲得が決定したこの時点で、リレーに備え、残りの試技を棄権し、1m50で競技を終了した。赤塚は1m75から開始した。怪我を考慮し、短助走での跳躍だった。1本目は失敗するものの、2本目で成功させた。続く1m80では、短助走では厳しいと感じたためか、助走を伸ばして挑戦した。しかし残念ながら、3本とも失敗に終わり、1m75で競技を終了した。1m80では、木下も競技を開始した。しかし木下はここで、1本目、2本目を失敗してしまう。後がない木下であったが、3本目には成功し、1m85に進んだ。続く1m85、1m90では、どちらもバーが僅かに揺れるものの、1本目で成功した。この時点で京大の選手も一名残っており、木下との一騎打ちとなった。続く1m95では、1本目は落としてしまうものの、2本目では僅かに揺らしながら、見事に成功した。1m95は、自己ベストタイであった。京大の選手も3本目に1m95を成功した。しかし2mではどちらの選手も3本全て失敗に終わり、試技数の差で木下

が1m95の一位、そして、赤塚が1m75の四位、村井が1m50の六位で競技を終えた。

状態が万全でない選手、他の種目との兼ね合いがある選手らでの、厳しい環境の競技であった。自己ベストタイではあったものの、本人の感覚では以前の試合と異なったらしい木下や、途中リタイアした村井、怪我明けでまともに練習できなかった赤塚と、今大会では全員が完全燃焼したとは言えないだろう。まだまだ伸びしろのある選手らであるため、一冬越えた来年の三人に期待がかかる。

10:00 男子ハンマー投 決勝

9月下旬の朝としては暖かい気候の中、男子ハンマー投が行われ、加藤(4)、土井(4)、佐竹(3)が出場した。東大側はハンマー投を専門とする選手がおらず、自己ベストが唯一30mを超えている加藤が京大の3番手に勝てるかどうかという厳しい予想であった。

1投目に土井が19m59、佐竹が18m78、加藤が24m32とふるわない中で京大の3番手までが35mを超えてきた。3人とも3種目に出場する予定であったので、勝負出来る種目に体力を温存することを考えて土井は3投目まで(2投目ファール、3投目19m43)、佐竹は2、5投目をパスして(3投目18m50、4投目ファール、6投目17m59)で競技を終えた。3人の中では比較的ハンマー投が得意な加藤は6投目まで挑戦したが、4投目の27m78(2、3投目ファール、5投目27m33、6投目26m07)で京大には及ばず、加藤が4位、土井が5位、佐竹が6位で下馬評通りの惨敗となった。

このままでは来年さらなる苦戦が予想されるため、専門種目に活かせる範囲で記録の向上を図ってもらいたい。

10:30 男子走幅跳 決勝

草野(4年)、木下(3年)、栗原(1年)の出場。天気は良好でかつ強い日差しは無く心地よい風が吹くなかでの決勝となった。優勝候補の木下、今季中盤から調子を上げ自己ベスト更新を狙う草野、自身初の公認7mへ後一步にせまる栗原と3人ともにそれぞれ大きな期待がかかる。

草野1本目。6m50で確実に記録を残す。栗原はファール。

続いて2本目ここで、高跳びで優勝を決めた木下が砂場に到着。助走練なしという悪条件でいきなり7m09をマーク。トップに立つ。3本目は手拍子で応援に熱が入る中、草野が6m67を跳び記録を伸ばす。栗原も6m84で記録を伸ばす。草野5本目は着地が思うようにいかない。栗原5本目、いい跳躍を見せるも記録は伸ばせず。草野最後の6本目は渾身のジャンプを見せるも、6m61で競技終了。栗原はファール。木下は7m17と自己ベストにせまる好記録をマークしさらに記録をのばした。

結果、木下が優勝、栗原が3位、草野が4位であった。高跳びと時間がかぶるタイトなスケジュールをものともせず優勝を決めた木下の圧倒的な安定性は現在のチームに必要不可欠になっている。また、7m手前の記録をきっちり跳び続ける栗原は今季中の7m超えが大いに期待される。残念ながら自己ベスト更新とはならなかったが、この大会が四年間の一つの区切りであった草野の力強い最終跳躍は次世代の飛躍へとつながる跳躍であったに違いない。

10:30 女子走幅跳 決勝

坪浦(4年)、藤原(3年)の出場。曇り空であったが、寒いわけではなく、適度に涼しい、非常に競技しやすいコンディションであった。しかしながら、内山(2年)が直前に行われた女子駅伝でケガを悪化させてしまい、欠場となり、補欠として藤原が競技することとなった。

1本目では、坪浦がファールするものの、藤原は2m47と記録を残した。点数獲得が決まった藤原は残りの試技をパスし、2m47で競技を終了した。以降の試技、2本目、3本目の中で坪浦は4m21、4m45と記録を残した。京大の選手は4m95、4m49とそれぞれが記録し、坪浦は二位の選手に4cm差に迫り、4本目以降に進んだ。4本目でも坪浦は4m65と記録を伸ばし、二位へと上がった。5本目、6本目では記録を伸ばすことはできなかった。京大の三位の選手が6本目に、坪浦に1cm差に迫る4m64を記録したが、順位は結局そのまま、坪浦は4m65の二位で競技を終えた。また、藤原は2m47の四位で競技を終えた。

内山の欠場というアクシデントもあったが、藤原が急遽専門種目でない種目に挑戦するという、チーム全体で点数を獲得しにいく姿勢が見られた試合だった。今年は

対校戦で敗れてしまい、悔しいシーズン終了となった。しかし、内山の復帰があれば来年の優勝旗奪還も可能であろう。この悔しさを忘れず、この姿勢のまま冬季練習に励んでほしい。そして来年には、チーム一丸で対校戦に勝ちに行く姿が、またこの走幅跳で見られることを待っている。

11:30 男子円盤投 決勝

京大戦男子対校円盤投げに土井(4年)、山之内(4年)、佐竹(3年)が出場した。下馬評としては1位が京大の選手で飛び抜けており、それ以外の選手は30m前半に記録が集中していたので、接戦になることが予想された。

本番当日、競技が開始され一投目。山之内は右にそれてファール、土井、佐竹は30mを少し超える記録を残し上々の立ち上がりであった。

二投目。土井はファール。山之内は立ち投で30mを越えベストを更新。佐竹は記録を少しのばした。

三投目。各人思うように記録がのばせず、3人ともファールに終わる。

この時点での順位は土井3位、佐竹4位、山之内6位であった。京大のエース大橋を除けば大接戦であり2位と6位の記録の差はわずか1m80cm程度。

四投目。山之内が30mを大きく越える会心の一投を見せるも惜しくもサークルの淵に触れてしまいファール。土井、佐竹もファール。

一方、5位であった京大の選手が記録をのばし2位まで順位を上げた。

五投目、六投目では京大の選手を含めて思うように記録がのばせず、順位変動は起こらなかった。

結果は土井32m18で4位、佐竹32m01で5位、山之内30m84で6位となり、スコルク負けで9点負け越した。

京大の選手が驚くようなパフォーマンスをしたというよりは、東大側が実力どおりのパフォーマンスができず、接戦をものにできなかったため、下馬評よりも大きく失点してしまったという印象であった。

これで4年生は引退となりさらに戦力がダウンしてしまうので、ピーキングなども含めた"試合で結果を出す力"を、冬練を通してさらに強くしていきたい。

13:30 男子棒高跳 決勝

2番に戸部(3年)、4番に實田(4年)、6番に三宅(2年)の出場。前日降っていた雨は止み、晴れた中での試合となった。

2m80から登場した戸部は一本目で難なくクリアし、続く3m20も余裕を持って一本目でクリアした。次の3m40からは實田も登場し、戸部とともに難なくクリア。戸部は続く3m50に挑戦するも、うまく感覚が合わずここで競技を終える。實田は自身の自己ベストに迫る3m80に挑むが、惜しくも三本とも失敗に終わり、二人は3m40で競技を終える。

ただ一人三宅は4m40から登場し余裕のクリア。この時点で優勝を決める。続く4m60も一度で成功。さらに大会記録となる4m81は一、二本目は失敗するもうまく修正し三本目でクリア。しかし次の4m90は惜しくも失敗となり、ここで競技を終えた。

13:30 男子砲丸投 決勝

佐竹(3年)、加藤(4年)、土井(4年)の出場。シーズンベストに基づく下馬評では1~3位を東大が独占しており、ハンマー投、円盤投での苦戦もあって、スコルク勝ちが期待された。

砲丸の調子が良いと話していた佐竹は安定した投擲を披露し、全ての投擲で10m以上をマーク。5投目でパーソナルベストタイの10m97を記録し1位で競技を終えた。

院試などの影響で十分な練習が積めなかったと話していた加藤も地力の高さを見せ、全ての投擲で10m以上をマーク。土井と競った結果、10m70の2位で競技を終えた。

土井は1投目で10m44を記録し、京大、金子(4年)の猛追を振り切って3位で競技を終えた。

本種目ではスコルク勝ちを達成し、京大に力の差を見せつけたが、4年生の引退後、チームとして砲丸投の地力をどう上げていくかが課題となるだろう。

13:30 女子砲丸投 決勝

内山(2年)、堀越(3年)の出場。本大会、女子は対校枠が各校2人、かつ4点制であるため、出場すれば得点が

できる。そこで専門種目外ではあるが2人が出場した。

堀越は4m62としっかり記録を残し、仕事を果たした。4〜6投目はパスした。全体の4位。内山は足に怪我をかかえながらの出場となったが、6投を投げきり、7m45で3位に終わった。

京大は2名とも自己ベストを更新し、選手層の厚さを感じさせた。

14:00 男子三段跳 決勝

木下(3年)、毛利(3年)、平井(2年)が出場。午前中から涼しい気候が続いた上、いい追い風が吹きグラウンドコンディションは良好であった。優勝候補の木下を筆頭に毛利、平井全選手に期待がかかる。

一本目は毛利が13m87の好記録でPBを更新。木下はジャンプで大きくくずれも14m51で暫定トップ。2本目は平井が綺麗に跳躍をまとめ13m32の記録を残す。木下は大きな跳躍を見せるもわずかにファール。2本目終了時点で2位に下がった木下が15m08に記録を伸ばし5cm差でトップを取り戻す。しかし、その直後に記録を並ばれ、セカンド記録に差でまた2位に下がる。久々の接戦に応援席も盛り上がる。4本目平井、毛利はうまく記録を残せなかったが木下が15m24の大跳躍で再びトップに。この時風は0.0、木下はPB更新かつ約四十年ぶりの大会記録更新という快挙となった。6本目は3人とも記録を伸ばせず、試合終了。

結果、木下が1位、毛利が5位、平井が6位であった。木下の快挙に加え毛利も自己ベスト。平井も三段挑戦2戦目ということで伸び代は大きい。今季の対校戦は終了したが、残りのシーズンまたは来季へ向けて全選手に期待がかかる。

14:30 男子やり投 決勝

男子対校やり投は曇天の中14時半から行われた。東大からは加藤(4年)、八木澤(3年)、中村(1年)が出場した。下馬評では3、4、6位であり、8点獲得することがノルマであった。

加藤は一週間前から調子が悪く、どの投擲もやりが低く出てしまった。力で投げた6投目の47m40が記録となり4位で試合を終えた。八木澤は七大戦以降の不調からの回復が期待されたが、全体的にやりが吹き

上がってしまい、3投目の45m87が記録となって5位で試合を終えた。中村は一橋戦で自己ベストとなる47m44を出しており、さらなる記録に期待がかかったが、ブロックがうまく決まらず2投目の44m83が記録となり、6位で試合を終えた。

下馬評を大きく下回りスコク負けしてしまった。4年生が抜けてさらに戦力が落ちるので、冬練で体をしっかりと作り、力の底上げを行いたい。

3. 選手の言葉

短距離4年 兄井啓太郎 (400mH, 4×400mR)

400mHと4×400mRに出場いたしました、短距離4年の兄井です。OBOGの皆様には日頃より温かいご声援をいただきまして、誠にありがとうございます。

私にとって今回の京大戦は、引退試合であると同時に、2年間苦しみられた怪我からの復帰戦でもありましたので、並々ならぬ決意を持って臨んでいました。

結果は、400mHでは念願の優勝を果たすことができました。ベストには及ばないタイムでしたが、優勝の瞬間はやはり喜びが爆発し、これまでの取り組みが報われたと感じるとともに、ここまで支えてくださった方々への感謝の念を抱かずにいられませんでした。

しかし、その後2走を務めたマイルリレーでは力の差を見せつけられる形となり、また、チーム全体としても京都大学に歴代最高得点を取られるなど、4連覇を目指していただけに大変屈辱的な結果となりました。

今シーズン、対校戦の結果では良いご報告ができませんでしたが、近藤新主将の下、後輩たちは必ずや強いチームへ生まれ変わってくれるはずです。卒業までの残された期間、七大戦総合優勝という来季の部の目標のために、私も微力ながら力を尽くしたいと思っております。OBOGの皆様におかれましては、東大陸上部に今後とも変わらぬご支援を賜りますようよろしくお願いいたします。

投擲4年 加藤輝仁 (やり投、ハンマー投、砲丸投)

京大戦でハンマー、砲丸、やりに出場した投擲四年の

加藤輝仁です。正直私の個人成績は自分自身であまり納得のいくものでは無かったし、部の歴史的な大敗の方が心にしこりとして残っている為選手の言葉なんぞ書いてられないというのが今の心境です。私の成績で当てられること自体いかに現在の陸上部が過去3年間に比べて弱体化しているかを表しているようなものですし。が、書くことになってしまったので少し書きます。

七大戦から1カ月院試休みがあり、9月も研究室に忙殺されてまともに技術練もウエイトも積めておらず、一週間前の段階でやり投に至っては40mしか飛ばないという有様で京大戦はいつそ正補交代してもらったほうがマシなのではないかと思っていました。そこで試合2日前に賭けでウエイトをギリギリまで追い込んでなんとかフィジカルだけでも元の状態に近づけることはできたと思いながら当日に臨みました。当日は、練習投擲と試技の中で勘を取り戻すので精一杯でどの種目もベストは出しきれていません。唯一砲丸投でスコルクを果たして最低限の仕事は出来たと言えるくらいです。

今後はまだ一度も出ていない関東インカレに出たいので院生でも陸上を続けていくつもりです。既に砲丸ではB標準は切っているのでA標準切りを、またハンマーでも標準を切ることを目標として練習を重ねながら東大陸上部を応援していきたいと思います。

これまでの応援ありがとうございました。また、これからも戦力的に非常に厳しく状況が続くので、陸上部により一層の応援をよろしくお願いします。

中距離3年 藤原ゆか (3000m 走幅跳)

対校女子3000mと走幅跳に出場しました、中距離3年の藤原と申します。走り幅跳びは専門外ですが、直前に怪我をしてしまった内山に代わり、出場致しました。

3000mについてですが、チームが優勝するための絶対条件、スコルクを目標にしておりました。今回、その目標を達成できた要因として大きく3つあると感じます。

一つ目は事前にあらゆる展開を想定し、それぞれに対応したレースパターンを考えたことです。当日展開されたレースも予想していたうちのワンパターンで

あったため、レース中はその走りを実行することに集中できました。

二つ目の要因は当日までに納得がいくような練習が積んでいたことです。これは当たり前のことだと思いますが、この当たり前があつてこそどのような展開になっても対応できる、つまり考えたレースパターンを実行できるのだという自信ができました。

そして三つ目の要因は関東大学女子駅伝で上手く長い距離を一人で走れたという経験で、これまでの走り込みの成果を実感し、自信をつけることができました。

今回、自分のできる最大限のレースはしました。しかしチーム全体は敗北し、坪浦さんを胴上げすることはできませんでした。チーム初の連覇を成し遂げることもできませんでした。女子パートが勝つために自分に何ができるのか。もっと真摯に向き合っていき、来年はこの悔しさを経験しないよう精進してまいりたいと思います。応援、サポート等ありがとうございました。

投擲3年 佐竹俊哉 (砲丸投、円盤投、ハンマー投)

「選手の言葉」を書く機会を頂くのは六大戦ぶりになります。投擲3年の佐竹です。今回の京大戦ではハンマー投、円盤投、砲丸投の順に出場しました。砲丸投でなんとか自己ベストタイを出して優勝出来たので書かせて頂けましたが、自分のこれからの可能性を考慮して最近では円盤投に重きを置いた練習を行っており、そこで勝つべき相手に惨敗してしまったので残念に思います。今シーズンを振り返って、力を投擲物に伝える技術が大事なことは自明ですが、それに拘るあまり筋力トレーニングを怠っては、そもそも身体面のスペックがないと発揮出来ない技術に手をつけられないということにやっと気付いたという感じでした。

投擲パートとしては4年生が抜けるとかなり厳しい戦力状況になることが予想されます。シーズン中というのはどうしても記録が落ちることを恐れて局所解に陥りがちなので、冬季練習を通して来年の関東インカレ等大きい試合で勝負出来るように投げの整合性を高めたり、新たな可能性を他の人に考えてもらったりすることも含め

で強くなっていければと思います。

中距離2年 小野康介 (800m)

今回、800mに出場させて頂きました、中距離2年の小野です。大学から陸上を始めた僕のデビュー戦が去年の京大戦であったため、この1年間の練習の成果を発揮するつもりで臨みました。また、京大側には、高校の後輩や、今年の七大戦で惜敗してしまった相手もいたのも、普段の対校戦よりもかなり気合が入っていました。

レースが始まると、この気合が空回りする事はなく、冷静に走り出すことができました。予め立てていた作戦通り、1周目は2,3番目で待機して楽に走ることを意識しました。ラスト550m付近からややロングスパート気味にペースアップをして、最後の直線で先頭に出ようと思いましたが、思ったようにカラダが動かず、結局、京大の1,2番手に押し切られて自分は3位でゴールしました。タイムも自己ベストには少し遠い1'56"68で、悔しい結果となりました。

今シーズンも残すところわずかとなりました。大きくタイムを伸ばす事は難しいかもしれません。しかし、夏に追い込んで練習したことを無駄にしないためにも、残された時間を無駄にせず、みんなで切磋琢磨して練習して行きたいと思います

跳躍3年 木下秀明 (走高跳,走幅跳,三段跳)

日頃より暖かな声援をありがとうございます。京大戦では走高跳、走幅跳、三段跳に出場させていただきました。どの種目も自己ベストや自己ベストにかなり近い記録を出し三冠、三段跳に関しては大会新記録で三連覇という形で終えることができました。京大戦では去年、一昨年も自己ベストを出しており、京大戦とは相性が良いのだと改めて感じております。

今シーズンは走幅跳、走高跳で多少の自己ベストは出したものの、メインとして練習してきた三段跳は14m後半に届く程度で停滞してきました。昨シーズンと比較して筋力、走力に関しては問題なくついている

と自覚していたのですが、技術面での迷走があったように思います。今回京大戦に出場するにあたって、昨年の夏頃に練習していた減速の少ない跳躍を意識したところ、自己ベストを更新することができ、しっかりと地力がついてきたことが確認できてホッとしています。良いイメージを壊さないようにしながらさらに洗練していき、来シーズンには全国レベルで戦えるように精進してまいります。

最後になりますが、京大戦当日は多くの方に応援していただき、ありがとうございました。これからの木下の活躍を是非ご期待ください。

4. チーフの言葉

短距離チーフ 河野太郎

短距離4年の河野です。今年の京大戦は、京大に大きく負け越す結果となってしまいました。短距離としても、京大に大きく差をつけられてしまい、前短距離チーフとしても、責任を感じています。

僕自身の結果を振り返ってみると、シーズン当初は関東インカレの標準を突破し、高校以来の自己ベストを更新するなど好調を維持していました。しかし、関東インカレ後は思うような結果が出せず、記録も低調となりました。結局、京大戦でも調子が戻ることではなく、決して満足のいく結果とはいえないなかでシーズンを終えてしまうこととなりました。最後の最後まで立て直しを図れなかったことに、ただただ自分の弱さを思い知るばかりです。

短距離パートとしては、来シーズンに向けて一層の走力強化が求められます。京大戦が終わり、僕自身は引退することになりますが、後輩の強化のため、微力ながらもやれることをやっていきたいと考えています。

4年間陸上を続けてくることができたのは、部員のサポートや監督・コーチのご指導、OBOGの先輩方のご支援のおかげです。本当に感謝しています。ありがとうございました。

中距離チーフ 早川航平

今年の京大戦は部全体として大敗、中距離パートとしても800m、1500m両種目ともに資格記録では勝ち越し

を予想されながら、10点を負け越す大敗となってしまいました。

大敗を招いた最大の原因は、コンディショニング能力の低さにあります。得点を左右する位置にいる選手の多くは、春先や夏場こそ勢いがあつたものの、その後やや停滞した雰囲気があり、それがすべて悪い方向に転がってしまいました。

もちろん、力が劣っていたという事実からも目を背けてはいけません。特に800mに関しては、資格記録こそ五角であったものの、京大側の選手は高校時代にはもっと速い記録を持っている選手ばかりでした。ポテンシャルで負けていて、コンディショニングで負けていては勝利の可能性はありません。

これらは確かに京大戦に出場した対校選手の問題ではありますが、同時にパート全体の通年の問題でもあります。調子を合わせるべき試合で自己ベストにかすりもしない、そもそも怪我や体調不良で出場できない、対校選手が固定化している、といったことが目につく一年だったように感じます。対策がとれなかったことは私の力不足という他ありません。

書ききれないほどの反省と後悔はありますが、新チームが敗戦を糧にし、見違える成長を遂げることに期待します。

長距離チーフ 松本啓岐

長距離チーフを務めておりました、4年の松本です。今シーズンは、長距離パートとしてどの対校戦でも勝ち越すこと、特に七大戦での全員入賞と京大戦での勝ち越しを目標としていました。しかし、近藤を除いて、皆様の期待に応えられるような活躍をした選手はいませんでした。

これはチーフを務めていた私の至らぬところであり、1人1人の甘さがそのまま現れた結果でもあります。今に始まったことではありませんが、長距離パートのみならず、他のパートにおいても対校選手とそうでない選手との実力差が大きいという問題が生じています。さらに、今年のチームは、優れた1番手がいながらにして2番手・3番手の実力不足により全体として大きく負け越すということが続けてきました。

これは、個々の意識という問題はもちろん否定できま

せんが、現在の陸上運動部の部としての在り方に限界が見えてきたためと私は考えています。

このように書くことと責任転嫁と思われるかもしれませんが、部の存在意義や理念を曖昧にしたまま、部員主体で運営するのであれば、部員1人1人の価値観でチームが運営されます。入部の段階で部の理念についてきちんとした説明を受けることもなく、部の理念と合致しない部員を排除する能力も風潮もないなら、そのようにチームが変わっていくのはやむを得ません。

そうしたチーム状況を本気で変えるためには、全体を統括する専任の指導者を雇う、入部制限を行う、普段の練習などでの縛りを強くするなどといった改革が必要になります。

自主性を残したまま運営するのであれば、1人1人の価値観が最優先となります。それが偶然一致して、チームとして高みを目指すことになればそれが理想ですが、「そうであるべき」を押しつけることには無理がありません。

後輩たちには、現行の体制と向き合い、部のあり方を今一度考え直してチームを再構築してくれることを期待します。

OB・OGの皆様には、今後も変わらぬご支援、ご指導をよろしくお願い申し上げます。

競歩チーフ 棟重賢治

1年間競歩パートチーフを務めさせていただいた棟重です。

競歩パートは、今年は低調な結果に終わりました。どの対校戦においても周りのレベルが上がりましたが、東大も個々の実力は昨年以上のもので勝負できるレベルにありました。目標としては関東インカレ複数入賞二桁得点、各種対校戦勝ち越しでしたが、関東インカレで2人入賞した以外は達成できませんでした。それどころか、格下相手にも負けてしまうシーズンでした。大事な試合で力を発揮できなかったり歩型が乱れたりしてしまい、このような1年になってしまいました。

日本の競歩はレベルアップしていて、全カレも今年は40分台でないと入賞できないレベルになりました。東大は距離には強いですが、よそに比べるとスピードが圧倒的に足りません。対校戦は特に短い距離が多いので今後

は歩型を大事にしつつスピードもつけていき、結果を残してチームに貢献できるようにしていきたいと思います。

1年間ありがとうございました。今後ともご支援、ご鞭撻のほどよろしく願いいたします。

跳躍チーフ 草野恒平

お世話になっております。今年度、跳躍チーフを務めさせていただきました、草野恒平と申します。この場を借りて、京大戦と、それを含む一年間について、ご報告させていただきます。

先日の京大戦についてですが、弊パートは大幅な勝ち越しが期待されておりました。しかしながら、結果は若干の負け越しとなりました。この結果を招いたのは、気の緩みに相違ありません。正選手が、特にシーズン中にベストを出した選手が怪我をし、万全な調子で試合に臨むことができませんでした。代替わり後、下級生中心のチームになりましたが、前チーフとして支え、雰囲気を作ることができなかったことに責任を感じております。

今シーズンについてですが、私がチーフの任に就いた時点で弊パートの選手層は決して厚いものではありませんでした。それに対し、部の目標は「関東インカレ一部昇格」です。多くの選手が実力と目標の距離を遠く感じたことでしょう。事実、今年度の関東インカレで出場者を増やすことはできませんでした。しかしながら、ほとんどの選手が本気でインカレを目指し、練習や試合に取り組んできたことも事実です。それは選手の陸上に対する想いに加え、中谷コーチや藤田監督を始めとする先輩方から脈々と受け継がれてきた、「強い跳躍」としての誇りや意地がそうさせました。現在は間違いなく苦しい時期ではありますが、必ず近いうちに花開くと確信しております。私も大学院で競技を続けようと考えておりますが、学部チームも私も、「強い跳躍」の復活のため今後も精進して参ります。今後とも弊パートを見守っていただけると幸いです。改めて、一年間ありがとうございました。

投擲チーフ 土井雅人

前投擲パートチーフの4年土井雅人です。今シーズンの投擲パートを総括いたしますと、4年加藤が国公立戦で砲丸投の関東インカレB標準を突破、3年佐竹が七大

戦で円盤投のB標準を突破、1年中村が一橋戦でやり投の高校時代のベストを大きく更新するなど、自己ベストの更新は見られたものの、大きく記録を伸ばせなかったという印象です。技術練習の内容を各自に任せてフォームの抜本的改造に取り組みなかったところにあるのではないかと思います。

今回の京大戦では砲丸投でスコルク勝ちをした以外、他の3種目全てでスコルク負けを喫するという結果でした。事前の資格記録で圧倒的差があったハンマー投は抜きにしても、資格記録で競っていた円盤投、やり投で負けてしまったのは勝負弱さ、ピーキングなど様々な要因があるとは思いますが、いずれにせよ猛省すべきことに変わりはありません。

私は選手の立場ではありますが、応援の盛り上がりでも京大は東大を圧倒していたと思います。京大側にとってはアウェイである環境の中、それを感じさせない熱狂具合は勝利への思いを感じさせました。

私はこれにて引退となりますが、まだこの部に残る後輩たちにはこの失敗を繰り返さないように練習やチーム運営に努めて欲しいと思います。

5. 試合結果

第90回 東京大学・京都大学対校陸上競技大会

男子100m 決勝(±0.0)

1	澤 薫	京大	10"80
2	加藤 寿昂	京大	10"94
3	庄司 溪	京大	11"03
4	井上 昂	東大	11"03 着差あり
5	阿久津 大貴	東大	11"07
6	聲高 健吾	東大	11"11

男子200m 決勝(±0.0)

1	澤 薫	京大	21"99
2	庄司 溪	京大	22"19
3	安藤 滉一	京大	22"27
4	聲高 健吾	東大	22"50
5	後藤 裕瑛	東大	23"00
6	河野 太郎	東大	25"41

男子 400m 決勝

1	浅井 良	京大	49"33
2	小谷 哲	京大	49"35
3	小原 幹太	京大	49"79
4	河野 太郎	東大	50"20
5	小嶋 健太郎	東大	50"56
6	長久 将	東大	50"98

男子 800m 決勝

1	土屋 維智彦	京大	1'55"43
2	木村 佑	京大	1'55"98
3	小野 康介	東大	1'56"68
4	友田 浩平	京大	1'57"39
5	坂口 諒	東大	1'57"40
6	早川 航平	東大	1'57"86

男子 1500m 決勝

1	近藤 秀一	東大	4'01"33
2	尾崎 拓	京大	4'04"65
3	清原 陸	京大	4'04"82
4	土田 侑秀	京大	4'05"17
5	妹背 優太	東大	4'06"28
6	長谷川 祐輝	東大	4'14"76

男子 5000m 決勝

1	近藤 秀一	東大	14'23"65
2	柴田 裕平	京大	14'27"15
3	尾崎 拓	京大	15'01"58
4	原田 麟太郎	京大	15'09"18
5	阿部 飛雄馬	東大	15'20"27
6	栗山 一輝	東大	15'44"23

男子 110mH 決勝(-0.2)

1	田中 伸幸	京大	15"09
2	小野 貴裕	京大	15"33
3	松田 光陽	東大	16"48
4	中島 盛喜	東大	17"01
5	村井 輝	東大	17"88
6	福島 理	京大	18"15

男子 400mH 決勝

1	兄井 啓太郎	東大	54"29
2	広兼 浩二郎	京大	54"68
3	五十嵐 隆皓	京大	55"76
4	長谷川 隼	京大	56"24
5	松田 光陽	東大	56"53
6	本田 洋平	東大	59"76

男子 5000mW 決勝

1	山西 利和	京大	20'18"30
2	高野 圭太	京大	21'43"63
3	大本 康平	京大	22'21"87
4	堀江 駿	東大	22'49"30
5	千菊 智也	東大	23'09"26
6	棟重 賢治	東大	DQ

男子 4×100mR

1	京大	加藤—安藤—庄司—澤	41"31
2	東大	村井—阿久津—井上—聲高	42"00

男子 4×400mR

1	京大	小谷—浅井—安藤—小原	3'16"88
2	東大	小嶋—兄井—長久—河野	3'22"00

男子走幅跳

1	木下 秀明	東大	7m17(±0.0)
2	澤 薫	京大	6m97(±0.0)
3	栗原 怜也	東大	6m84(+0.3)
4	草野 恒平	東大	6m67(±0.0)
5	本居 和弘	京大	6m66(±0.0)
6	小野 貴裕	京大	6m50(+0.7)

男子走高跳

1	木下 秀明	東大	1m95
2	竹田 風馬	京大	1m95
3	五十嵐 隆皓	京大	1m85
4	赤塚 智弥	東大	1m75
5	平島 敬也	京大	1m75

6 村井 輝 東大 1m50

男子棒高跳

1 三宅 功朔 東大 4m81
 2 珍坂 涼太 京大 4m20
 3 平島 敬也 京大 4m00
 4 五十嵐 隆皓 京大 3m60
 5 寶田 雅治 東大 3m40
 5 戸部 潤一郎 東大 3m40

男子三段跳

1 木下 秀明 東大 15m24(±0.0)
 2 三神 惇志 京大 15m08(+0.7)
 3 伊東 悠希 京大 14m53(+0.8)
 4 吉川 樹 京大 14m17(+0.8)
 5 毛利 冬悟 東大 13m87(-0.2)
 6 平井 智史 京大 13m32(+0.4)

男子砲丸投

1 佐竹 俊哉 東大 10m97
 2 加藤 輝仁 東大 10m70
 3 土井 雅人 東大 10m44
 4 金子 溪人 京大 10m40
 5 松井 そら 京大 10m22
 6 浅野 智司 京大 9m80

男子円盤投

1 大橋 悟 京大 40m01
 2 平島 慶也 京大 33m71
 3 金子 溪人 京大 33m67
 4 土井 雅人 東大 32m18
 5 佐竹 俊哉 東大 32m01
 6 山之内 良太 東大 30m84

男子ハンマー投

1 大橋 悟 京大 41m73
 2 浅野 智司 京大 38m29
 3 三谷 圭 京大 35m23
 4 加藤 輝仁 東大 27m78
 5 土井 雅人 東大 19m59

6 佐竹 俊哉 東大 18m78

男子やり投

1 中山 奎吾 京大 60m81
 2 浅野 智司 京大 57m96
 3 澤田 剛 京大 50m41
 4 加藤 輝仁 東大 47m40
 5 八木澤 光大 東大 45m87
 6 中村 優太 東大 44m83

総合得点

1位: 京都大学 228点
 2位: 東京大学 144点

第16回 東京大学・京都大学対校女子陸上競技大会**女子100m 決勝(±0.0)**

1 坪浦 諒子 東大 13"07
 2 川崎 仁美 京大 13"08
 3 小野 萌子 京大 13"34
 4 高石 涼香 東大 13"99

女子400m

1 坪浦 諒子 東大 58"11
 2 小野 萌子 京大 1'00"07
 3 後藤 加奈 京大 1'01"19
 4 高石 涼香 東大 1'01"69

女子800m

1 高石 涼香 東大 2'16"42
 2 川崎 仁美 京大 2'27"91
 3 岸本 絵里 京大 2'29"22
 4 荒木 玲 東大 2'32"63

女子3000m

1 高石 涼香 東大 10'39"29
 2 藤原 ゆか 東大 10'48"71
 3 岡本 萌巴美 京大 11'03"89
 4 岸本 絵里 京大 11'10"02

女子4×100mR

1 東大	川崎一小野一後藤一林	51.55
1 東大	荒木一坪浦一堀越一高石	54.84

女子走幅跳

1 川崎 仁美	京大	4m95(-0.6)
2 坪浦 諒子	東大	4m65(±0.0)
3 林 玲美	京大	4m64(±0.0)
4 藤原 ゆか	東大	2m47(-0.6)

女子砲丸投

1 横山 優花	京大	10m66
2 中野 水貴	京大	8m82
3 内山 咲良	東大	7m45
4 堀越 美菜	東大	4m62

総合得点

1位: 京都大学	35点
2位: 東京大学	31点

6. 自己記録更新者一覧**9/16,17 第49回関東理工系学生対校陸上競技大会**

1500m 古賀淳平(2年) 4'16"32

9/23,24 第258回日本体育大学長距離競技会

1500m 富原健太(4年) 4'20"45

1500m 村田博(1年) 4'53"29

10000m 栗山一輝(2年) 31'39"65

9/24 第4回日本大学競技会

100m 伊藤康裕(2年) 11"15(+1.4)

100m 後藤裕瑛(4年) 11"23(+0.5)

100m 近藤弘樹(2年) 11"32(+1.4)

100m 今井樹宏(4年) 11"43(+0.5)

200m 伊藤康裕(2年) 22"66(+1.8)

200m 後藤裕瑛(4年) 22"68(+0.4)

200m 今井樹宏(4年) 23"24(+1.8)

10/1 第90回東京大学・京都大学対校陸上競技大会・第16回東京大学・京都大学対校女子陸上競技大会

200m 斎藤嘉紀(3年) 23"98(±0.0)

800m 大島知之(3年) 2'02"63

800m 富原健太(4年) 2'06"48

5000m 榊村浩行(1年) 16'12"17

5000m 古賀淳平(2年) 16'12"77

5000m 小田貴大(4年) 16'43"99

円盤投 山之内良太(4年) 30m84

三段跳 木下秀明(3) 15m24(±0.0)

三段跳 毛利冬悟(3) 13m87(-0.2)

7. 2017年度 部内五傑

(順位 氏名 (学年) タイム 日付)

男子 100m

1 聲高健吾(1年)	10"83(+0.4)	7.1
2 阿久津大貴(2年)	10"85(+0.8)	7.30
3 河野太郎(4年)	10"96(+1.0)	5.7
4 井上昂(1年)	11"02(+0.9)	7.30
5 伊藤康裕(2年)	11"15(+1.4)	9.24

男子 200m

1 聲高健吾(1年)	21"58(+1.7)	5.27
2 河野太郎(4年)	21"61(+0.6)	5.27
3 阿久津大貴(2年)	22"48(+1.5)	7.1
4 長久将(4年)	22"64(+1.0)	6.17
5 伊藤康裕(2年)	22"66(+1.8)	9.24

男子 400m

1 河野太郎(4年)	49"85	4.8
2 小嶋健太郎(3年)	49"92	7.1
3 長久将(4年)	50"28	7.1

4 松田光陽(2年)	50"79	6.4
5 寶田雅治(4年)	51"23	5.26

男子 800m

1 小野康介(2年)	1'55"52	7.30
2 坂口諒(3年)	1'55"63	4.8
3 早川航平(4年)	1'57"45	6.3
4 妹背雄太(4年)	1'57"48	4.30
5 伊藤龍一郎(3年)	1'58"47	6.3

男子 1500m

1 近藤秀一(3年)	3'53"75	4.8
2 妹背雄太(4年)	3'59"68	4.8
3 小野康介(2年)	4'03"74	8.27
4 渡部慎也(2年)	4'07"94	6.3
5 長谷川祐輝(3年)	4'12"85	7.29

男子 5000m

1 近藤秀一(3年)	14'23"62	9.30
2 阿部飛雄馬(2年)	15'08"07	7.30
3 松本啓岐(4年)	15'08"84	6.4
4 栗山一輝(2年)	15'17"27	6.4
5 妹背雄太(4年)	15'45"80	9.30

男子 10000m

1 近藤秀一(3年)	29'16"49	5.25
2 阿部飛雄馬(2年)	31'12"74	4.22
3 松本啓岐(4年)	31'21"69	4.22
4 栗山一輝(2年)	31'39"65	9.23
4 田村和也(4年)	32'43"71	4.22

男子 110mH

1 杉森康平(8年)	15"88(+1.6)	6.17
2 寶田雅治(4年)	15"91(+0.8)	6.17
3 村井輝(2年)	16"03(+1.3)	4.8
4 松田光陽(2年)	16"12(0.0)	8.27
5 中島盛喜(4年)	16"61(+1.7)	5.7

男子 400mH

1 兄井啓太郎(4年)	54"29	9.30
2 松田光陽(2年)	56"53	7.1
3 寶田雅治(4年)	56"65	7.1
4 本田洋平(1年)	59"76	9.30
5 中尾幸志郎(2年)	1'00"08	6.4

男子 3000mSC

1 阿部飛雄馬(2年)	9'35"80	7.30
2 栗山一輝(2年)	9'50"93	7.1
3 肱岡佑(3年)	9'52"18	3.25
4 妹背雄太(4年)	9'52"76	3.25
5 古賀淳平(2年)	10'05"38	9.16

男子 5000mW

1 渡邊成陽(5年)	20'52"99	7.1
2 棟重賢治(4年)	21'08"55	6.17
3 堀江駿(3年)	21'49"77	6.17
4 千菊智也(1年)	22'20"08	7.30

男子 10000mW

1 堀江駿(3年)	44'39"77	5.27
2 棟重賢治(4年)	46'00"02	5.27

男子 4×100mR

1 阿久津(2)-聲高(1)-河野(4)-長久(4)	41"27	5.25
2 井上(1)-聲高(1)-河野(4)-竹井(D2)	41"43	7.1
3 井上(1)-聲高(1)-影山(2)-阿久津(2)	41"52	7.30
4 村井(2)-阿久津(2)-井上(1)-聲高(1)	42"00	9.30
5 井上(1)-阿久津(2)-影山(2)-渡辺(3)	42"19	6.17

男子 4×400mR

1 小嶋(3)-河野(4)-兄井(4)-長久(4)	3'17"45	7.30
2 小嶋(3)-河野(4)-松田(2)-長久(4)	3'19"22	5.27
3 小嶋(3)-河野(4)-松田(2)-長久(4)	3'21"14	7.1
4 阿久津(2)-小嶋(3)-岩崎(1)-河野(4)	3'22"57	8.27
5 小嶋(3)-兄井(4)-長久(4)-河野(4)	3'23"50	6.17

男子走幅跳

1 木下秀明(3年)	7m18(-1.5)	4.6
------------	------------	-----

2 栗原怜也(1年)	6m98(+0.6)	8.27
3 草野恒平(4年)	6m83(+1.4)	7.1
4 藤原暉(2年)	6m79(-0.6)	4.6
5 三宅功朔(2年)	6m58(+1.9)	8.6

男子三段跳

1 木下秀明(3年)	15m24(±0.0)	9.30
2 平木基人(3年)	14m38(-0.3)	7.30
3 原澤龍平(2年)	13m97(+0.8)	7.30
4 毛利冬悟(3年)	13m87(-0.2)	9.30
5 平井智史(2年)	13m63(+0.0)	8.27

男子走高跳

1 木下秀明(3年)	1m95	8.27
2 赤塚智弥(2年)	1m90	6.17
3 寶田雅治(4年)	1m65	3.18
4 村井輝(2年)	1m60	5.6

男子棒高跳

1 三宅功朔(2年)	5m10	7.16
2 寶田雅治(4年)	4m00	8.27
3 戸部潤一郎(3年)	3m40	9.30
3 村井輝(2年)	3m30	5.6

男子砲丸投

1 土井雅人(4年)	11m33	7.30
2 加藤輝仁(4年)	11m21	6.17
3 佐竹俊哉(3年)	10m97	7.30
4 村井輝(2年)	9m54	5.6
5 山之内良太(4年)	9m29	6.17

男子円盤投

1 佐竹俊哉(3年)	34m79	8.27
2 土井雅人(4年)	31m80	7.30
3 山之内良太(4年)	30m84	9.30
4 八木澤光大(3年)	27m62	8.27
5 寶田雅治(4年)	23m86	3.19

男子やり投

1 加藤輝仁(4年)	50m86	7.30
------------	-------	------

2 八木澤光大(3年)	49m22	7.1
3 中村優太(1年)	47m44	8.27
4 村井輝(2年)	44m33	8.6
5 石田駿平(1年)	42m69	6.17

男子ハンマー投

1 加藤輝仁(4年)	31m89	7.29
2 佐竹俊哉(3年)	17m69	8.5

女子 100m

1 内山咲良(2年)	12"72(+0.6)	8.5
2 坪浦諒子(4年)	13"07(±0.0)	9.30
3 高石涼香(3年)	13"99(±0.0)	9.30

女子 400m

1 坪浦諒子(4年)	58"11	9.30
2 高石涼香(3年)	59"44	7.1

女子 800m

1 高石涼香(2年)	2'11"23	7.23
2 荒木玲(2年)	2'32"84	7.30

女子 1500m

1 高石涼香(3年)	4'43"83	8.27
2 藤原ゆか(3年)	4'57"03	8.5
3 荒木玲(3年)	5'21"41	3.26
4 堀越美菜(3年)	5'37"55	4.22

女子 3000m

1 高石涼香(3年)	10'15"39	7.30
2 藤原ゆか(3年)	10'57"21	7.30

女子 5000m

1 堀越美菜(3年)	21'09"97	3.18
------------	----------	------

女子 100mH

1 内山咲良(2年)	15"89(+1.8)	8.5
------------	-------------	-----

女子 400mH

1 坪浦諒子(4年)	61"82	8.6
------------	-------	-----

女子 4×100mR

1	荒木(3)-坪浦(4)-内山(2)-高石(3)	51"23	7.30
2	堀越(3)-坪浦(4)-内山(2)-高石(3)	52"70	8.27
3	荒木(3)-坪浦(4)-堀越(3)-高石(3)	54"84	9.30

女子 4×400mR

1	堀越(3)-荒木(3)-藤原(3)-高石(3)	4'35"34	7.1
---	-------------------------	---------	-----

女子走幅跳

1	内山咲良(2年)	5m41(+1.8)	6.17
---	----------	------------	------

女子走高跳

1	内山咲良(2年)	1m54	8.5
---	----------	------	-----

女子三段跳

1	内山咲良(2年)	11m43(+1.4)	7.1
---	----------	-------------	-----

女子砲丸投

1	内山咲良(2年)	7m64	8.27
---	----------	------	------

8. 主務より**8.1 応援 OB・OG 紹介**

9/30に東京大学陸上競技場で行われました、第90回京都大学・東京大学対校陸上競技大会 兼 第16回京都大学・東京大学対校女子陸上競技大会に際し、応援に駆けつけてくださったOB・OGの方のご氏名をご卒業年順に報告いたします。(敬称略)

昭和39年卒 浅澤誠夫
 昭和32年卒 西尾弘二
 昭和32年卒 藤田宏明
 昭和34年卒 上原豊吉
 昭和34年卒 柴崎嘉之
 昭和35年卒 梅田圭良
 昭和35年卒 笹治峻
 昭和37年卒 相馬光之
 昭和38年卒 浅野勝己
 昭和38年卒 興津誠

昭和39年卒 八島秀雄
 昭和40年卒 石堂怜
 昭和40年卒 由井浩
 昭和40年卒 渡部一之
 昭和41年卒 足立三朗
 昭和41年卒 上田裕一
 昭和42年卒 伊澤敏彦
 昭和42年卒 岡本正宏
 昭和42年卒 林義之
 昭和43年卒 小林寛道
 昭和48年卒 横田逸郎
 昭和49年卒 稲垣義孝
 昭和49年卒 小寺清
 昭和51年卒 田上静之
 昭和52年卒 海宝明
 昭和54年卒 中谷敬二
 昭和54年卒 早道信宏
 昭和54年卒 藤澤治雄
 昭和55年卒 斎藤誠二
 昭和56年卒 坂本修一
 昭和57年卒 石村達清
 昭和57年卒 溝口勝
 昭和57年卒 室城信之
 昭和57年卒 柳沢健彦
 昭和58年卒 浅野浩二
 昭和58年卒 景山太郎
 昭和60年卒 宇佐美潤祐
 昭和61年卒 大谷薫
 昭和61年卒 成家秀樹
 昭和61年卒 藤村陽
 昭和63年卒 寺田秋夫
 平成元年卒 松尾裕徳
 平成3年卒 小野満
 平成3年卒 馬場勝也
 平成5年卒 遠藤亘
 平成6年卒 神田潤一
 平成11年卒 明石頭
 平成12年卒 渡邊国広
 平成13年卒 岡野浩行
 平成15年卒 相原佑康

平成15年卒 高梨幹生
 平成15年卒 橋本武
 平成20年卒 石原宏尚
 平成22年卒 日下桃子
 平成23年卒 近藤堯之
 平成23年卒 斉藤瞬也
 平成23年卒 西田昂広
 平成23年卒 渡邊拓也
 平成25年卒 岩川純也
 平成28年卒 郡健太
 平成28年卒 小西慶治
 平成28年卒 佐藤駿
 平成28年卒 鈴木敦士
 平成28年卒 藤井将大
 平成28年卒 藤田旭洋
 平成29年卒 阿部龍太郎
 平成29年卒 荒田彰吾
 平成29年卒 泉悠太
 平成29年卒 稲葉啓人
 平成29年卒 岩渕康太
 平成29年卒 奥村俊樹
 平成29年卒 鍵本直人
 平成29年卒 加来宗一郎
 平成29年卒 加藤騎貴
 平成29年卒 軽部智
 平成29年卒 河原未来
 平成29年卒 櫻井悠也
 平成29年卒 白形優依
 平成29年卒 須江絢子
 平成29年卒 田中恭平
 平成29年卒 戸田賢希
 平成29年卒 西川拓
 平成29年卒 西村智宏
 平成29年卒 原耕資
 平成29年卒 深澤竜太
 平成29年卒 福島洋祐
 平成29年卒 松本大樹
 平成29年卒 箕島頌
 平成29年卒 森本淳基

たくさんの方々が応援に駆けつけてくださいました。
 部員一同、心より御礼申し上げます。

8.2 行事予定

今後の行事予定をお知らせいたします。

10.14(土)

箱根駅伝予選会@立川

8.3 連絡先

連絡先

慶弔のご連絡は下記連絡先までお願い申し上げます。

総務委員長：斎藤誠二

TEL : 03-5370-9370

Mail : Seiji_Saito@suntory.co.jp

学生主務：原島敏知

〒167-0054 東京都杉並区松庵 2-9-16

TEL : 090-8848-7525

Mail : shumu@uttf.org

学生主務補：荒木玲

Mail : uttf.shumuhu@gmail.com

部便り郵送不要の方は、お手数ですが学生主務補までご連絡下さい。

この部便りは陸上運動部ホームページ内の「OBOG 向け」からもご覧になれます。

URL : <http://www.uttf.org>

学生主務 原島敏知

部便りに関するご意見、ご感想は部便り主任の大島までお送り下さい。

部便り主任 大島知之

(Mail: uttfbdyri2017@gmail.com)